

日本における個人のフォークソングの受容の一側面 -中高年層の語りに着目して-

瀧口 直矢

フォークソングはもともと世界各地の民謡を指す言葉でもあるが、20世紀半ばのアメリカ合衆国におけるフォーク・ミュージック・リバイバルを通じて多種多様な変化を遂げた。そしてその影響を受けてフォークソングは日本にも広がり、独自の変化をしていった。このフォークソングの文化が隆盛していた当時は、反ベトナム戦争や学生運動など、権威主義的な社会のシステムをうち破りたいという思いがフォークソングを発展させる土壌としてあり、さらにフォークソングによってそのような時代状況を強化するムーブメントが芽生えたという仮説を立てつつ、当時フォークソングが愛好された要因を明らかにすることが本研究の目的である。

先行研究としては「現在」におけるフォークソングの機能に着目した小泉（2011）の研究はあるが、受け手の「当時」の意識に焦点を置いてはいない。よって本研究では半構造化インタビューによってフォークソングに関する当時の愛好的な語りを通じて受け手の意図を調査した。調査対象者は9人であり、当時（1960～1970年代）にフォークソングの文化にふれていた人々である。

調査結果により、フォークソングの歌われる形態として、アコースティックギター一本で自己を主張するという要素が、当時の受容者の意識に大きく影響を与えていることが分かった。また、フォークソングにおける自分一人で完結して、手作りで自分が何かをできること、簡易なコード進行を覚えることで演奏が可能であるなどによる参入の容易さというものが、フォークソングの文化を広げていった要因となったということも示された。

当初の仮説による、当時が自由な時代であったということは本研究では浮かび上がらず、また、必ずしも当時の愛好者が政治的な側面をフォークソングの魅力として見出していたわけではなかったことが分かった。一方で、アコースティックギター一本で自分の意見を表現できる、演奏を行える参入の容易さという要素が愛好の要因として示された点は、共演者を募ったり、第三者を介在させずとも、自給自足で表現を行えるようになったという点につながることも考えられ、反体制的、反商業的な表現なども含めて可能にしたことが考えられるだろう。またこのフォークソングにおいて自給自足で表現できるようになったことは、より自由な表現を可能にしたと捉えられ、ひいては現代に至るにつれ音楽制作ソフトや動画投稿サイトの出現により、より容易に完結した表現を行えるようになっていった流れの一端である、と考えることができる。

（指導教員 後藤嘉宏）